

B-10 農村における冬期の幼児服の実態と重ねぎの仕方による保温効果について

愛知県・農林部・農業技術課 奥田 智子

1. 愛知県の農村の子供は、冬期に必要以上に重ねぎ枚数が多く、そのために活動しにくく、不衛生な衣生活の地域が多い。そこでこの実情調査を基にして、材質別組み合わせによる保温効果を測定し、かるく、温かく、活動的で、経済的な重ねぎの仕方を研究し、実生活に役立てることを目的とした。

2. 昭和39年においては、実情調査をするために、県下を6地帯に区分し、それぞれの地帯の保育園各1つと、これと比較するために都市の団地の幼稚園1ヵ所の計7ヵ所を調査した。この調査の対象は3～4歳の男女児で、6地帯の保育園児計113名、都市の幼稚園児20名を選んだ。尚、この調査は気温の最低時期（1月下旬～2月上旬）の定例身体検査時（毎月1回行なわれている）に予告なしに実施した。この調査を基にして、都市と農村に最も多い重ねぎの仕方各1をとりあげ、これらに1試案（合理的と思われる重ねぎの仕方）を加えて、それぞれの場合の保温性について、実験的に測定した。尚、別に、下衣の場合について、風にあたったときの保温性の実験も試みた。

3. 調査の結果では、農村は都市に比して着衣枚数、衣服重量ともに大であった。しかも対体重比の標準体重比以上の者が81%であった。なお、対体重比の標準以上の者の中で53%の者は、全国平均の体重以上であった。農村の着方は、重ねぎ枚数が多いのにも拘らず、保温効果が小さく、試案と比べれば、都市、農村ともにその効果は低かった。